心学と地域福祉(一)

——浜松市における救済事業——

三浦辰哉

Ⅰ はじめに
Ⅱ 心学と救済事業
Ⅲ 大成心学信行社
(1) 明治の心学と大成心学信行社
(2) 浜松と浜松信行社
(3) 信行社の運営方法
(4) 福島豊策と高村栄蔵
Ⅳ 遠江育児院（救護院）
里親と階級移動
Ⅴ 結びにかえて

Ⅰ はじめに

心学とは、享保十四年石田梅岩によって起こされた実践哲学の一種である。今日では、世界的に類を見ない商人哲学として、また社会教化思想として認識され経済史学や商業学あるいは教育学や社会史の分野での研究が成されている。一方で、社会福祉研究においては元来心学との関係についての研究というものはあまり成されてはいない。これ

は先に挙げたように、それが商人哲学としてまず世に表れたことと無関係ではないであろう。しかし、そのことのみが社会福祉研究との関係を疎遠にした原因とは言い難い。強いて原因を挙げるならば、心学が「総じて人材の不足と道話の俗化並に時代の趨勢とによって天保以来急激に衰退を見せ、明治維新以後は凡そ二・三十年間の余勢を僅かに残す」[1]のみで凋落してしまったため、社会事業の萌芽が表れる大正期には既に心学自体が事実上壊滅状態に会ったことが挙げられよう。もう一つの理由は、社会福祉研究が今まで地方史に目を向けることが少なかったことである。ここでいう地方史とは、社会福祉を含めて地方経済や生活民俗史を意味する。

地方史の視点から見ると、明治期において「心学ルネッサンス」ともいうべき運動が地方を中心に展開している。その運動の一つが、浜松市における「大成心学信行社」による相互扶助組織化と「遠江育児院」である。これらはまた、行政主導の地域福祉ではなく、庶民の側から芽吹いてきた本来の地域福祉の一つであると思われる。

本論文は、浜松市における心学講社(舎)と民間福祉事業との関係を中心に調査したものであり、心学研究の序論ともいうべきところである。この調査については「遠江育児院」と、さらにその前身とも言うべき「三方原救貧院」(別稿にて扱う)とを中心に行ったものである。ただ、調査にあたっては太平洋戦争によって浜松市自体が戦火に焼き尽くされ、資料の収集もままならない状態のため、多くの部分で地元の古老達からの聞き取り調査を頼りにする以外に無かった。

Ⅱ　心学と救済事業

心学を社会福祉の立場から研究しようというかぎりには、その接点とも言うべき実際の心学の思想と事業を明確に

しておく必要があるであろう。

心学は石田梅岩によって起こされ[1]、弟子の手塚堵庵によって文章化され広まった思想体系である。その「都鄙問答」（巻之四）に次のような文章が記されている。

金銀ハ天下ノ御宝ナリ。銘々ハ世ヲ互ヒニシ、救ヒ助クル役人ナリトシルルト見ヘタリ。コノ故ニ困窮に至リテ多クノ人ヲ救ヒ、又救ハレシ者ドモヨリ、「忝ナシ」ト染々礼ヲイフ者モナケレドモ、其ノ厭ナキハ、聖人トイヘドモ此ノ上モ有マジキカト思エリ。[2]

石門心学の特徴と思われるのは、江戸時代特に商人への取り締まりが強化された享保の時代に「商工は市井の臣なり。臣として君を相くるは臣の道なり。商人の売買するは天下の相なり」[3]と商行為を肯定する一方で、先の文面に表れるような布施を中心とした社会奉仕を教義の実践方法として義務づけている。「互ヒニシ」とは、相互扶助の意味であるがそれは心学一門の事のみではなく国民全体にまで及び、具体的な行動としては様々な救済事業として表われる。「金銀（税金）」は「天下」すなわち国民全体の「宝（予算）」であるから、「役人」（宝を分配する義務を持った人。商人と政治家の義務）は利益を上げる幸福に浸るのだけではなく、その幸福をすべての人に還元することを喜びとせよと教えとしている。士農工商という身分制度は、元禄時代には既に自己柔盾をさらけだしていた。中でも、最も賤しい身分とされた「商人階級」の台頭は目ざましく、町人文化という新たな文化を誕生させた。だが、享保の改革はその支配体制の基盤である、武士階級の復権と同時に「商人階級」の抑圧を目指したものであった。「都鄙問答」は、いわばこうした時代において、学問として職業上の貴賤意識の解放を決定づけたものと言えよう。

さらに梅岩の孫弟子に当たる中沢道二は、「一切の経一切の書物も、皆明徳を明らかにする、我心の所書きじゃ。

世間に書を読む読人もたんとあれど、大方文字の沙汰ばかりで、肝心の心の沙汰をするものがない。[4]」と、当時の儒教や仏教が経文や立て前にとらわれ、本質的精神を読み込もうとしていないと批判し、心にしみた学問は実践によって始めて生かされると教えている。

こうした教えの実践は、主に「間引き」の悪習の矯正と貧困者の救済に向けられた。和歌山県の心学修敬舎では、天明六年（一七八六）が丙午の干支にあたり、この年に生まれた女の児は縁遠いというので、女とも男ともわからぬ胎内の子供を流してしまう悪習が盛んであったため、[5]扇子に「丙午の迷信」について記したものを全国の心学講舎に領布させるというキャンペーンを行っている。他に「間引き」の矯正については次のものが明らかになっている。

寛政二年　津山にて「間引き」の風習の矯正の他、下館にて「間引き」の風習の矯正。

後者は、間引きの風習によって年々二・三十人の人口の減少が見られ、その対策のために心学者北条玄養を招いて教化を委託したものである。[6]その他の時代にも、「間引き」や「狐付き」といった迷信からの人心の解放が、心学の一貫したテーマとされた。

その他に、救貧対策事業としての舎田の開放と施米・施粥がある。舎田とは、心学講舎が講舎の維持の為に作った田地であるが、そこで取れた米を貧困な小百姓に分配するという事業を行った。[7]施米・施粥については、次のような資料がある。

心学講舎の記している資料によれば、天明の飢饉に際して町奉行所は自ら救米を分配したが、その施す所が僅少で手続きが徒さらに煩わしかったために、利用者が集まらずに心学講舎のほうが評判が良かったという。[8]嘉永三年の関西地方の大飢饉に際しては、京都の町奉行が心学団体に委託した施米施粥の事業が行われている。このときは、既に

町奉行所は救米の事業を心学講舎に一任している。この嘉永三年の事業は約一年間にわたって行われた。施行の方法は心学者達が協議して計画され、京都と周辺の心学講舎合計九舎によって手分けされ、それぞれ施行の区域・人数・時間と米高とを割り当てて行われた。心学側の記録によれば、一日あたり約一万六千人の窮民に施米がなされたことになる。(9)

こうしてみると、心学が他の宗教・思想と違うところは自分自身が悟りを開き、安心立命を究極目的とすることではなく、むしろそうした自己満足的な思想体系となることを否定し、実践的行動原理としての社会改良運動として理解されるところにあるのではないかと思われる。

とはいえ、こうした救済活動というものは、当然のことながら心学講舎に限った特殊なものではないし、それまでの歴史の中で様々な形で行われている。ただ嘉永時代の心学講舎の救済活動にいたっては、それが半官半民の形で役割分担の上、組織化されていることが現代的なものである。また、こうした役割分担が成されたことは、「工商」といった町人階級といったものが、すでに事実上被支配階級ではなく武士階級と同等の力を認められてきていたことの表れともいえる。

こうした心学講舎の組織力と活動は、幕府の行政にとっても侮り難いものであるだけではなく、先に挙げた社会教化や救済事業のように行政上の様々なメリットがあった。もう一つのメリットは、心学の教義の柱が質素・倹約であり、町人階級の増大する力を抑制させるという目的も同時に満たすものであったことである。そうしたメリットのために、幕藩体制の後半になると各藩は心学者の召し抱えを行い、半ば御用学問化されるようになった。そして明治維新を境として、新しい思想の導入がなされてくると共に、心学はその独自性を失い、その運命を幕府と共にした感が

ある。

Ⅲ　大成心学信行社

(1)　明治の心学と大成心学信行社

幕府の庇護を受け御用学問化していた心学は、明治維新以後その存在意義が薄れ、さらに天皇制支配を徹底させようとする政府によって、廃仏毀釈に見られるような他宗教および思想弾圧が行われ、壊滅的状態に陥った。その一方で、心学の復権を目指して心学本来の教義を再認識すると共に、新たな時代に即したものに作り変えようとする心学ルネッサンスとも言うべき改革が行なわれた。その一つが、守本恵観を始祖とする大成心学信行社である。

大成心学信行社は、心学講舎の中でも異端的存在である。第一に、心学講社でありながらその名称に「大成」という仏教用語が使われていること。第二に、心学講舎という名称から心学講社という名称になり、社団法人化されていることである（浜松市では当初心学講社信行倶楽部と言った）。こうしたことから、心学研究の第一人者である石川兼博士もその著書「心学教化の本質並発達」（青史社）において、心学講社の一覧からはずしている。いわば正統派石門心学にたいして亜流の心学講社といえる。

守本恵観について語られている文献は殆ど無い。彼の生地である亀岡市においてすら、資料らしい資料は残されておらず、その家系に逸話として残っている程度である。したがって、我々が手軽に触れることが出来る資料は、現在のところ京都市嵯峨二尊院内にある頌徳碑しかない。現時点では、今やその存在すら風前の灯火になってしまった、

浜松信行社員であった人々からの聞き取り調査と頌徳碑からその実態を推し量ることしかできない。

守本恵観は、天保一四（一八四三）年、質屋守本治郎兵衛の長男として現在の京都市中京区釜座通り竹屋町下ル亀屋町に生れた。母は、京都府亀岡市の竹岡太郎右ェ門の娘である。後に彼の精神発達に深い影響を持ったと思われるのは、母方の家庭によるところが大きいであろう。この母方の家は、その経済状態は定かではないが、慈善事業に古くから係わっていたとされている。さらに熱心な仏教徒であり彼の幼少時から浄土宗に帰依していた。これらのことは、彼の生涯を決定する一つの要因と考えられる。

一六歳のとき、商業実習のため、京都市烏丸の太物商井上吉兵衛（美濃利商店）に預けられ、僅か五年ほどで経営を一任されるにいたり、二九歳で独立するまでの前後一四年間で、当時の明治維新の混乱期の中でさえ経営基盤を固めてしまった。おそらく商才があったのであろう。

だが、これだけの商才に恵まれ、周囲の期待を受けながら、突如として布教師へと転身してしまうのである。その点についての真相は不明であるが碑文を要約するならば、彼は「商業実習中に道話を学び、また、杉本・柴田両師について仏説を聴き…神儒仏の真理にもとづき人心を救済するをもって教旨と為す。老派を創り、道場を上下弐京に設けて信行社と号す」[10]とある。ここに紹介されている「杉本・柴田両師」は、戒名以外は不明であるが、碑には興味深い事実が記されている。まず、杉本師の戒名は、遊夢心誉是空法師・杉本是空とあり、明らかに僧侶であろうと思われる。これに対し、柴田師の戒名は、戒雲恵楽禅定門・柴田道話とある。ここでいう道話とは、心学者の意味である。すなわち、恵観は、仏教と心学から同時に教えを受ている。このことは、梅岩が神道・儒教や朱子学を経て心学の開祖となったのと同様に、恵観の場合心学の思想と仏教の修養とを基礎に新たな心学を計画したのではないかと思われ

る。なぜ二つの思想のうち心学へ傾倒したのかという根本的な疑問は、恵観が「商業実習中に道話に触れた」のも京都という町が心学発祥の地であり、一種のバイブル化して広く町人・商家に慣習化していたことに関係するのではないかと思われる。時は明治維新を経て、政府の基礎も固まらず市民生活は不安定であったから、拠り所となる思想が求められ、それが伝統的心学の改革という形に表れたのであろう。

恵観が京都に信行社を発足させた正確な時期は不明であるが、その後の展開は次の通りである。

明一六・三　兵庫県養父郡三谷村（一、二〇〇）
明一七・一　東京市日本橋十軒店町（九〇〇）
明一九・三　京都府南桑田郡稈田野村字鹿谷（二〇〇）
明二五・五　滋賀県水口町（三〇〇）
明二八・五　横浜市南太田町（六〇〇）
明三二・一　静岡県浜名郡浜松町（三〇〇）
明三三・一一　静岡市安西町（三〇〇）
明三五・四　静岡県清水町（八〇）
明四三・一一　静岡県沼津町（六〇）
明四四・三　京都市下京区東洞院通り七条上ル
明四五・四　岐阜県大垣町（五〇）
明四五・秋　福島市（三〇）

その他各地に三〇〇人程散在していた。　＜（　）内は明治四四年当時の社員概数＞

資料提供　浜松市大野木吉兵衛氏

(2) 浜松と浜松信行社

上記したように、静岡県内にたて続けに四つもの講社が創られているのは、明治三十年代より浜松市（当時は浜松町）が「近代商工都市」へと発達を始めたのとともに、静岡県が東海道筋において軍事的にも流通的にも重要視され、とくに商工業の急速な発達を見たことに関連するであろう。

その中にあって浜松市は、心学とは縁が無い町だった。(11) なぜならば、江戸以降の浜松は、小藩六万石の城下町ながら徳川家康の出世城というゆかりはあったものの、現実は農業地域であり、心学の基盤である商人階級の勃興が遅れたためである。そのため、正統派「石門心学」の止敬社が掛川にあったものの、石門心学が浜松に入るのは信行社よりもはるかに遅く、産業都市化された戦後に入ってからのことである。(12)

浜松市史では、信行社が創立された当時を次のように書かれている。

古来浜松に心学の教えありしを聞かざりしが、明治三十年頃東京の医療機械販売者宮川長右衛門、鍛冶町三好義昌方により、仏教主義心学をなす。義昌を福島豊策に紹介す。豊策大いに感じ東京に出て教えを受け、帰りて有志を集めて教えを拡む。時に守本恵観あり、学深く徳高しありてますます教えを拡む。(13)

まさに明治二十年代になってようやく産業化が進み、「帝国製帽（明二九）」・「日本楽器製造（明三〇）」・「日本形染（明三三）」さらに、製織・染色・販売の三部分を統合する「遠江織物同業組合」の成立によって、「近代商工都

（表1）

	戸数	人口
明治二二	二・六一九	一三・六三〇
二三	二・六五〇	一四・一〇九
二四	二・八〇五	一四・二四八
二五	二・八七五	一四・六七〇
二六	三・一〇五	一五・三三四
二七	三・二一二	一五・九五六
二八	三・三三四	一六・七二〇
二九	三・四六二	一八・九九二
三〇	三・五六二	一九・一五一
三一	三・六九九	一九・五六八
三二	四・〇五三	二一・〇七六
明治三三	四・一五五	二二・一三八
三四	四・一八五	二二・二六八
三五	四・二六八	二二・七四八
三六	四・三三八	二三・一一〇
三七	四・四七五	二三・八五三
三八	四・五六九	二四・一二四
三九	四・七二五	二五・〇四三
四〇	四・九七五	二五・八五〇
四一	五・八一七	三〇・三一八
四二	六・三〇六	三四・五二四
四三	六・五五九	三・五四九五

（浜松市史・全　大正一五年一〇月発行より抜粋）

市」へと変貌した。また、義務教育の就学率も明治三一年に六割となり、三九年には九割五分にまで向上し、男女中学校・商業高校も誕生した。人口も徐々に増え始め（表1）、表に示されるように、明治二二年から明治四三年の間に三倍も人口が増えている。これは特に、私企業の発達の他に国家的意義としては東海道本線という幹線が発達したことによって、東西の地理的条件から鉄道工場の基地として、また軍事的にも新たに脚光を浴びてきたことによって、工業地帯としての意義が見い出されたためであろう。

反面、周囲の農村地帯では貧しいまま残され、貧困者は低賃金労働の担い手として浜松市内へと流入することとなった。当時の社会事業としては恤救規則だけで、すべてにいき渡ることはなく、救貧施設も郊外にある個人経営の

「三方原救貧院」をおいて他無く、「子棄て」「間引き」が横行していた。この窮状に当時浜松の医師福島豊策は、幻灯会や仮名文字絵本などを配付して悪習の矯正に尽力したが、個人の力ではいかんともしがたく、組織的方法による救済事業の必要性を訴えていた。こうした実態と、当時心学の復権を目指していた信行社の目的が一致したのである。

(3) 信行社の実態

信行社の現社員の鈴木犀十朗氏の話によれば、「信行社の真意は『転迷開悟』して仏教の真理を日常生活の中に織り込み、報恩感謝の日暮らしを続け、一人でも多く勧誘して自他共に喜ぶことが目的であります。……生活と仏法は車の両輪のごとく、紙の表裏のごとく切り離すことの出来ない関係にあります。こうした意味の信仰と生活の結合を円満にする親睦団体であります。」と言うように、教義の柱を仏教に求めている。このため、一般に、仏教団体と認識されがちである。なぜこうした教理をうたったかという理由は、次のような事が考えられる。

第一に、始祖守本恵観が幼少の頃から浄土宗に帰依し、その後も僧籍につくなどして、仏教との縁が深かったこと。(とは言え、発足当初は僧籍者の入社を拒否していた。入社可能になったのは、後述の福島・高村以降のことである)

第二に、明治維新以後、神道国教政策をとった政府によって、神道以外の宗教は弾圧を受けたが、僧籍者の布教活動のみは禁止しなかった。そのため、僧籍を持つ守本恵観が、一種の隠れ蓑として教理に採用したのではないかと思われる。(12)

第三に、もともと町人階級の未発達だった浜松やその他の地方都市においては、「心学」という未知の思想を打ち出すよりも、「仏教」をうたい文句にしたほうが布教しやすかったのではないかと思われる。

(a) 入社

毎年一～二回入社希望者を取りまとめ（一回三〇名程度）、恵観より定められた強化を受ける。その内容は、親兄弟など身内の者にも秘密厳守を義務づけられた。これは、商業者が多かったため、先に述べたような理由から思想団体に入会していることを出来るだけ隠したかったのではないかと思われる。

初日は、A幹部から「因縁」を、二日目にB幹部より「十戒」についてを聴聞する。続く二日間は沐浴して身を浄め、最後に夜間土蔵の中で厳粛に修業して、見届けた幹部から免状が授与される。

(b) 集会

石田梅岩が始めた都鄙問答を基に、ゼミナール形式で社員が自由に意見の交換を行う。体験談・時事問題・仏典抜粋註解などで、最後にその場の先生がしめくくるという方法が取られた。

(c) 社員の様相

信行社創設以来一貫して社員の大半は、実業家達であった。「心学」が、商人哲学として発達してきた経緯からすれば当然の成り行きであろう。とくに、明治三〇年以降は産業都市へと変貌してきた浜松市において、その勢力は絶大なものとなっていた。前記した企業の他にも、金融業者特に報徳社運動家から金融業者となり、信行社に入会した人々も多かった。その他の職種としては、教員が多く、「遠江二葉会」という分派を形成し、児童を寺院へ集め教化活動を行った。(15)

(d)　社会活動

社会活動としては、衛生講話・寄付活動等のほか、もめごと相談等を行った。特に大規模なものとしては、大正一五年の日本楽器争議の時、解雇された女子社員達を再雇用させている。

その他の特徴は、後述の福島の所を参照のこと。

(4)　福島豊策と高村栄蔵

大成心学信行社は守本恵観によって創立されたが、それを発展させた功労者は前出の福島豊策と高村栄蔵の二人である。

福島豊策は、天保九年（一八三八）年佐賀蓮池藩の士族の家庭に生まれた。幼いときから篤学志に燃えたが、家が貧しいためその一念を遂げさせるために富家に母親が彼を養子に出そうとしたが、親孝行できなくなるとしてこれを固辞したという。かれは、医師大庭氏の弟子となり苦学の末、その後長崎医学校に入学し医師となった。[16]

彼は山梨病院を振り出しに、新潟・高田・兵庫・洲本各病院を巡歴し、明治十二年浜松病院長として赴任してきたが、明治二十年独立して開業した。彼は、医師としての診療とともに特に尽力したのは、衛生思想の徹底と当時この地地域で古くから風俗化していた「狐つき」という妄想の排除・「間引き」「児童遺棄」の矯正であった。このため自宅に講席を設け、こうした催しに馴染みがない人々のために、幻灯機等を購入してこの流布に尽力したものの思うようには行かなかった。明治一七年当時、福島は「第三回遠江私立衛生会」での演説および論説で、「病院論」としてこの問題を取り上げ、病院が中核となってこうした社会問題に対処すべきことを提案している。[17] この提案は、後に

「信行社」によって実践される。

彼が「信行社」の組織化に際してモデルとしたものは、長崎時代に学んだヨーロッパの相互扶助組織（ギルドと思われる）と英国の医療衛生事業である。彼の主張は、貧困家庭の問題はその家庭が貧困であるがゆえに、衛生思想を始めとした社会教化を受けることが出来ず、結果として不衛生で、しかも民間信仰とも言うべき迷信に惑わされ、命を落とす者が少なくない。そうした貧困な家族を相互扶助の中に組み込むことは、何よりも病院がその基地となることが望ましいというものである。[18] また、富者の義務として貧苦にある者を助ける者として、金持ちの患者からは倍額の診療費を徴収し、貧困家庭からは無料診療として実践したが、協賛者も多く、一種のステータスとして寄進するものも多かった。しかし、こうした仁医の評判は一方で、子棄ての場所とされ、診療所の門前に棄て子が置かれる事も多かった。このことが、福島に遠江育児院を設立させる直接の理由であったろうと思われる。[19] すなわち、彼が信行社を始めたのも、彼の理想的病院と貧民救済の実現のための一方法であったといえる。彼は信行社の設立に次のように述べている。

「政治の要は国民の生命財産を守ることにほかならない。教育の要は人に知識をすすめ実業を授けることにほかならない。宗教の要は人の迷を解き善く処することに道に導くことにほかならない。処世の要は人の行いを戒めてお互いに援助し合うに他ならない。要するにあらゆる職業は、世を利し己を利するに他ならない。[20]」

大成心学信行社との出会いは、福島が六二歳の時である。六七歳で亡くなるまで、この発展に尽力している。

さて、明治三十二年正式に浜松信行社が設立するのであるが、同時に「遠江育児院」の認可を受けている。この育児院自体が、信行社の相互扶助の一つに数えられるが、現時点では全国の信行社を調査するにはいたっていない。

遠江育児院については後に述べるが、信行社の発展のもう一人の功労者は高村栄蔵である。信行社による心学の近代化は、この二人の尽力によるものと言って良いであろう。

高村は、慶応元年（一八六五）浜名郡新居町出身の、ドイツ式織物業者である。近年まで浜松周辺は「遠州織物」として、当地を代表する産業であった。明治二十三年、かの豊田佐吉とともに東京の内国博覧会を見学し、豊田は織機へと高村は化学染料へと道を向けたと言う。(21)

彼は、報徳社社員であったが（福島もそうだった）、心学への興味を持ち自発的に参加し、福島の講話に感銘して入社している。

福島の人脈と心学の特性から、初期の社員は商人・銀行家など資産家が多かったが、高村は、さらにその枠をひろげ、一般化させた。(22) その主な功績を挙げると以下の通りである。

①不文律の形で導入された諸行事を成文化した。

②社員のみの集会のほかに、社外の名士を講師に招く講演会を主催して一般公開した。

③一般の児童、婦女子を対象に特別の行事を企画し、あるいは社員を講師に派遣して、積極的な社会教化活動を展開した。

④僧籍者であろうと宗教に係わり無く、入社資格を自由化した。

⑤組織を法人化した。

すなわち、当初秘密結社的であったものを、積極的に間口を広げることで、社会教化団体として活動できるようにしたという点で、高村の功績は大きい。

(5) 遠江育児院（救護院）

遠江育児院は、明治三十二年八月付（浜松信行社の発足が一月）で静岡県知事から福島豊策・大島周吟が「慈善救済事業経営許可」を受けて始めた児童収容施設である。

以下、遠江育児院規則並職務章程より抜粋した福島の宣言及び施設の構成である。

嗚呼博愛仁慈ナル同胞諸君

凡ソ天地間ニ於テ最大不幸ハ老病死ノ三苦ノ他マタ比スヘキモノナシト誰モ夫ノ貧民ノ心情ホト人世ノ悲惨ノレニ過クルモノナシ其僅ニ生ヲ保ツト誰モ家に食スヘキ品ナク使ルヘキ産ナク親子互ニ朝旦ニ飢ヲ呼ヒ暮タニ渇ヲ告クルモ厨内空シクシテ如何トモスル能ハス親子相見テ黙然唯タ涙ヲ呑ノミ其心情死ノ生ニ勝ルヲ仮言セン斯ル天命薄キ親子ノ境界ハ更ニ情愛ノ深キヲ加フルナルシハ然ルニ其愛慕ノ情一層禁ル能ハサルハ結句其児ノ飢死スル現状ノ惨憺ニ堪サルニ忍ヒス終ニ血涙ヲ揮ツテ愛児ヲ途ニ捨テ以テ世ノ慈善家ノ救助ヲ乞フニ至リテハ親母ノ心果シテ如何之レヲ聞クモノ之ヲ知ルモノ開目沈思豊袖手傍観安逸ヲ貪ルノ秋ナランヤ茲ニ不肖等殊ニ救世ノ任ニ在ル者依テ卒先救護ノ一端ヲ盡サント欲シ育児院ヲ設立スル所以ナリ之レニ由テ廣ク世ノ仁慈博愛ナル諸君ニ訴テ以テ本院ノ目的ヲ達セント欲ス仰願クハ大方の慈善家同胞ノ急ヲ愍ムノ情掬ノ涙ヲ應分ノ義損金ニ垂レ賜ハン刀ヲ希望ノ至リニ堪エス

遠江育児院の構成は次のようになっている。

役員

院長　一名　　副院長　一名　　主事　若干名　　会計　若干名　　顧問員　若干名

雇婦

保母　若干名　乳母　若干名

会計

本院ノ経費ハ総テ寄付金及物品ヲ以テ支弁ス

当初、遠江育児院として浜松市成子町の大厳寺の境内に設けられたが、その後経営悪化により、引佐郡井伊谷の正泉寺内に移されて遠江救護院と改名して再出発した。そして遠江救護院は、正泉寺住職の鈴木大降夫妻によって運営された。福島の本宅と大厳寺が至近距離であったため、敷地を要する施設のことゆえ境内を借用することとした。

大降師は、明治十四年生まれで、三十四年細江町普門院にうつり三十八年に正泉寺住職になった。大隆夫妻は救護院の事業を引受け、廃院となる昭和十年頃まで常時十七・八人の子供を引き取っていた。どのような事情のある子供達であったかは、現存する資料の中には含まれていない。

以下、四歳頃から救護院で生活をしていた太田米蔵氏の回想である。

食事は大麦・粟・米少々のおかゆで、朝顔茶碗に七分目、それに朝は汁を椀に半分、昼はたくあん二切れに梅干し一つ、夜は芋や南瓜、これが常識であった。いつも空腹だった。

供米と書いた茶封筒をもって托鉢に回った。その袋に玄米を入れてくれる。村内は勿論、小野、伊目、池田、伊平、奥山等方々に出掛けた。昼には行った先々で堅い飯と濃い味噌汁をご馳走してもらうのが嬉しかった。

大降師は現金収入を得るために種々な事を考えたが、松葉煙草で失敗すると、松葉エキスを作り瓶詰で販売した。これは三年ほど続いた。コーヒー豆の栽培もやった。子供達はそれらの仕事に係わった。

寒中でも単の着物一枚、足袋無し、薄い掛け布団一枚で震えていた。本堂でお経を教えられた。読みが悪いと叱られ、十日ほどで暗唱に移る。般若心経、帰敬文など、小学校の時代に覚えさせられた。早朝の読経、十分間の坐禅、子供には厳しい日課だった。

やう夫人は早朝四時頃起きて働いていた。絶対に分け隔てなく、実に良く面倒を見てくれた。夫婦とも、決して手は出さず、口で徹底的に反省を求めた。叱りはするが、それは愛の鞭だった。辛いことが多く、正直嬉しいことは少なかった。正月に二銭の小遣いを貰ったり、十五粒程の金米糖を貰ったりしたのが嬉しかった。

大降師は、単に孤児を大人に育てるのではなく、仏教的な意味の修業によって、将来立派に一人立ち出来る人間を作ろうとしていたと思う。

（山浦俊治「遠江救護院と鈴木大降」『静岡の福祉を創った人々―社会福祉の先覚者シリーズ』第五号昭和六十年より）

(6) 里親と階級移動

遠江育児院に対し、信行社が直接的に援助をしていた痕跡は少ない。これは、浜松の経済が大正期以降経済的に頭打ち状態が続いた事もあるが、遠江育児院を仲介として信行社の組織内部において里親事業が行われ、実際に里子として養子に迎えられているケースが多いことも挙げられる。

福島が計画した信行社による相互扶助思想の実践は、里親事業に具体化される。すなわち、貧困家庭で生まれた児童がその生活から脱却するには、裕福な家庭へと戸籍を移動する以外にはない。そうでなければ、一時的に窮乏から

逃れたところで院を出れば再び貧困の中に戻らなければならない。そのために院内で躾をし、身寄りの無い児童であればしかるべき名家への里子の途を作ることを、本分とした。例を挙げれば、福島豊策自身が率先して養子に迎えているし、山葉寅楠（現・ヤマハ日本楽器創立者）を始め、主要メンバー全てが養子を取り、その養子に相続をさせている。[23] これは梅岩の「互スル」思想にほかならない。

この点については、商業学の分野で浜松企業の特質として挙げられているが、ほとんどの地元企業が養子をとって後を継がせている。[24] 遠江育児院での児童の入所年齢は一三歳までであるが、「規則」によればその児童が学校卒業後、商家又は会社より使用人の申し込みがる場合、本人の了承の上で紹介する旨明記されているが、多くの場合育児院の躾の良さから養子として迎えられることが多かった。これによって、極貧の状態で生まれた或は捨てられた児童が、育児院を通して階級移動が可能となる様、計画されていたのである。この実践は、生き残りをかけた企業にとっては練金術のような意味を持つものであったが、昭和の大恐慌をへて地方の弱さもあり、昭和一〇年に遠江育児院も解散し、その後信行社による里親事業は行われていない。

結びにかえて

現在浜松の信行社は、取材に伺った鈴木犀十朗を最後に自然消滅してしまっている。まだ不明の点が多く、他の地域の信行社との関係は今後の調査によって明らかにしたいと思う。

心学は、地域社会の福祉活動の実践哲学として、市井の思想家達がその地域に必要なものを調査・選拓して実践し

ているという点で、地域福祉研究において示唆的である。

信行社と遠江育児院が行った事業は、現在ではほとんど公的機関による社会福祉事業や民間福祉事業にとって代わられている。しかし、ややもすれば、地方復権・地域福祉の名の下に上意下達的な政策が押し付けられがちであるのにたいして、地域の必要から心学講社を通して篤志活動を組織化してきた事に、心学研究の可能性を感じる。

戦後の石門心学の展開ついては、別稿にて著したい。

引用文献

(1) 「浜松と心学」飯尾哲爾　「遠江郷土研究誌・第二巻所収」
(2) 「近世庶民教育思想　石門心学　上」七百二十頁より　日本図書
(3) 前掲『近世庶民教育思想　上』
(4) 「日本思想体系　石門心学」柴田実　二二七頁　岩波書店
(5) 「石田梅岩と『都鄙問答』」石川兼　一二頁　岩波書店
(6) 「増補　心学教化の本質並発達」石川兼　六〇頁　青史社
(7) 「石田梅岩と『都鄙問答』」石川兼　一二頁　岩波書店
(8) 「石田梅岩と『都鄙問答』」石川兼　一三～一六頁　岩波書店
(9) 「増補　心学教化の本質並発達」石川兼　六一～六二頁　青史社
(10) 守本恵観の頌徳碑＝明治四十四年三月建立・東宮侍講正四位　勲二等文学博士三嶋毅撰文・蘭堂石井元重書などとあり、漢文によって書かれているが、本論文には要約して引用している。
(11) 前掲「浜松と心学」飯尾哲爾より
(12) 「浜松と石門心学会」大野木吉兵衛　浜松短期大学研究論集　一五号
(13) 「浜松市史　全」大正十五年版　九七六頁　浜松市役所発行
(14) 藤谷俊雄「廃仏毀釈」（日本歴史大辞典第八巻）一一頁

(15) 「遠江二葉会要覧」一―十頁を参照
(16) 山田萬作編著「嶽陽名士伝」長倉書店　昭和60年復刻版
(17) 第三回　遠江私立衛生会　於浜松田町幻忠寺　議事録
(18) 前掲「嶽陽名士伝」遠江私立衛生会会誌及び鈴木犀十朗氏よりの聞き取り調査に基づく。鈴木氏は「ギルド」という名称は使っていない。「西洋の職人組合」ということから、推察した。
(19) 前掲「嶽陽名士伝」
(20) 前掲「嶽陽名士伝」
(21) 「新居町史」および「二宮尊徳集」（玉川大学出版部）一三三頁
(22) 前掲　「浜松と心学」
(23) この点については、鈴木氏・大野木氏も指摘されているが、参考資料の中の家事要件録・社史を参考。
(24) 「浜松商法の発想―ホンダ・ヤマハ・カワイ・スズキの超合理主義」梶原一明　講談社　八五―九八頁

参考資料及び取材地

ヤマハ日本楽器社史　浜松商工会議所六十年史
平野家家事要件録　静岡銀行史
横田家家事要件録　井伊谷正泉寺
高林家史　一―三　亀岡市教育委員会〔心学資料館〕

他、経営史学者の大野木吉兵衛先生には多くの貴重な資料を提供していただいた。